

マ

スクの冬

笠井和明

本当であれば、この夏場に東京オリンピックが開催され、観光客も東京に押し寄せ、なんだかんだと人混みだらけとなる東京であったが、思わぬ「コロナ禍」の中、「緊急事態宣言」「入国制限」「営業自粛」「外出自粛」となり、今年前半はとても静かな東京と相成った。

夏になってもそれは取まらず、「第2波」の危惧が語られる中、かつて多くの仲間がそこで生きていた新宿中央公園のポケットパークを中心とする北側の芝生広場には「スターボックス」などの商業施設が作られ、「おしゃれ」な広場がひっそりとオープンしていた（お隣の渋谷区で宮下公園もまた、この秋、何とも今風の公園にリニューアルした）のを皮肉っぽくながめていたのは私たちだけだろうか？

かつて、この「ポケットパーク」は、1998年の西口地下火災以降、毎週の炊き出し、そして越冬の拠点として利用させてもらったのであるが、再開発のため近隣に大きなマンションが建ち、そこから迷惑と云う苦情の中、新たな場所を模索していた頃の面影は今も無い。恐らく、ここにおっちゃん達のブルーテントや炊き出しの列が並ぶと云う光景が再現されることはないであろう。それだけ管理された近代的な公園になろうとしている。

公園全域を見回しても、今やそこにはおっちゃん達が生きて来た「証」を見いだすのは困難である。

が、公園のふもとの道路を歩けば、都庁下周辺にかけ、50名ばかりの生活の跡が目に入る。色々な対策の結果、公園集中型から、目立たぬその周辺に分散、拡散し、全体として良く把握できないようにいつの間にか

ってしまった。

都内の都市公園でのテント生活者は、対策化、高齢化のため数少なくなっている。今や数えるほどで、東京全体で云うなら、その生活形態は県境の河川敷が中心となっている。こと新宿においては皆無で、道路などでの半固定層と、駅周辺に畴を探す移動層がほとんどで、その数は私たちが夜間歩けば、100名近い仲間と出くわすこととなる。この数字はここ数年ほとんど変わらず、活動現場では出会えない仲間も含め、全域で150~200名が新宿区のキャパシティのようである。公式発表では今年の



1月の「概数調査」は、新宿区は106名となっているが、そこら辺の誤差は昼間と夜間の時間帯の違いで解釈可能である。ことさら大声をあげることでもなからう。

一口でホームレスや路上生活者と云うが、その実情は地域においても、生活形態においても、今やかなりの差異がある。もはやあまりひとまとめにして対策やらを打つ時ではないようである。「自立支援」なり「生活保護」なり、手法はほとんど変わっていないが、そこにつながることは、今は少ない。

週明けの朝、私たちは必ず新宿福祉事務所に顔を出すのであるが、新規相談のブースはいつも空いている。

「緊急事態宣言」の時だけは流石に役所は混雑をしていたが、それはネットカフェが、都によりほぼ強制的に閉鎖されたことによる「救済措置」がとられたことで、そうなたただけであり、そこにおっちゃん達の姿はなく、若い男女の姿がとりわけ目立った。

こちらも生活困窮者と一口で云うが、色々と立場や環境によって、かなりの差異があるようで、実態が見えにくいだけに、普段は「補足」はされない。けれど、こう云う非常事態時に、新宿の街の中から出されたその姿を拝見し、何人かと話しが出来たのは、貴重な体験であった。

まあ、普通に好感のもてる若者達である。勿論家庭の事情は複雑である。普通の家庭に育ち、普通に大学を出て、普通の会社に就職しと、そんな世間が理想とすべき若者は、当然ながら、ここにはいない。様々な人生のハンデやハードルの中、必死に、良いか悪いかではない様々な職業に就き、それでも友人や恋人と共に必死に生きている、そんな若者達である。

福祉事務所のワーカーもそう云う子相手で大変である。世代が違くと共通項を見いだすだけでも時間がかかる。お互い理解しないまま、事務的に書類をこなしている、若いワーカーも立場や出自の違いは明確（今どき中高卒の役人はいない）で、なかなか「ため口」も出来ない。面接に疲れたのか、仕舞いには書類を書いて、郵送してくれとそんな感じ。まあ、それも仕方なし。

コロナ禍の生活困窮者は、とりあえず職場と住居を、無理やりでも維持していく。そうしないと、社会不安が増長しかねない。住所を失いそうな人々には、そうさせないために施策を打つ。他方、既に住所を失っている人々には、特別何もしないのであるが…。

「救済、救済」と云うのが、今のトレンドで、困窮者

のみならず、観光業界やら飲食業界、業界団体やら事業主への「救済」も含め、コロナ禍は、そんな上から視点の「救済」がいつの間にやら跋扈するようになった。

それが都にせよ、国にせよ、そう云う政治的な判断でもある。野党やマスコミが喜ぶ極端な事態の進行より、遅々とした進行の方を選ぶ。そんな経験は既に行っている、学習はされている。

生活保護制度も物事を隠ぺいさせる、そう云う側面もっている、これら生活困窮者対策等の延命措置策が切れたとしても、そこで「はい終わり」とはならず、今度は生活保護の窓口が混雑するだけである（たいがい、窓口は一緒であるが）。

そうなると、集団でそれらを組織してどうのうこのや政治的局面でと云うより、地道にこつこつと、彼、彼女らの生活を支え、信頼関係を作り、次に進むきっかけを作れるかどうか。そんなことが問われているのであろう。

所詮は役所の「制度」は「制度」でしかなく、縛りがつきものである。それに反発し、自由をもとめ、そこからぼれる人々は一定数居る。若者であれば尚更である。所謂「制度の挟間」みたいなものは、バブル崩壊後の社会に比べれば、これまた社会が経験し学習したこともあり、だいぶマシにはなったようで、そこからポロポロとこぼれると云うことはない。今はポロポロではなく、じわりじわりであり、そして、こぼれる先は路上だけではない。そこも含め見いだしていかないことには、社会から相対的に見棄てられた路上生活者だけが、ポツンと孤立してしまうことになりかねない。

まあ、この先どうなるのかは分からないが、あの元気な彼、彼女らの姿を、しょぼくれた路上で見るとか、それが無いよう、唯々祈るだけであるが、そんな希望はやはり虚しく、巡回、パトロールの中でそんな仲間が、目につくようになったのはこの夏頃からである。

どうしても地方から流れて来ると云う構造は何があっても変わらないのか、外出自粛などが解かれると同時に、人々は新宿に足を向ける。

他方、路上生活者でも、暴力団員でも定額給付金が貰える云うのは、この春から夏、路上においても大きなニュースで、そのための条件を色々と調べ、住所が置いてあればそれでよしとなったので、住民票の移動が始まった。役所の対応は色々あったものの、申請した仲間は問題なく貰えた。もちろん、住民票の移動を諦め、面倒臭く思う仲間も大勢居たので、そんな仲間には情報提供の

み。一緒に役所に同行してくださるボランティアも居り、ちょっと複雑な仲間と一緒に同行。時には窓口で喧嘩をして、多少の不備は押し通して来た。

誰がもらって、誰がもらっていないか、なんて野暮なことは言わないし、知らない。それが仲間内の不文律のようになっていたので、我々も、我々が関わった20数名の仲間のことしか知らないし、またその詳しいことも口外などしない。

実際これで助かった仲間の話は色々と聞いた。借金の返済にあてたり、ひそかに帰郷する費用に使ったり、ひそかにおいしいものを食べたり、等々。いつも貰ってばかりの生活なので、消費する喜びを久しぶりに味わい、少しは「社会復帰」(?)の役には立ったのかも知れない。

他方、貰わなかった仲間は、淡々といつもの生活。雑仕事の増減はあったものの、とりわけ新宿暮らしには変化なし。歌舞伎町の客足が途絶え、「しげもく」が拾えなくなり、外国人観光客が減り、「賽銭」が少なくなったりしても、花見やら花火大会が自粛でアルミ缶が集まらなくとも、そこはじっと我慢。

食うこと、寝ることだけは止められないので、仲間を頼ったり、あちこち動き回ったりと、新宿を離れる仲間も見受けられたが、きっと新しい場所で、今も上手くやっているであろう。

その意味では頼もしいし、それは、与えられたと云うか、そこしかないと云うか、そう云う条件の中で、不満を持って内にも秘め、それでもしっかりと生きて行く。ある意味、生活が出来てしまっており、よほどのことがない限り、それを変えようとはしないし、よほどのことを積極的、計画的にたぐり寄せようとも思わない、良い意味での「諦観」と云うものを持っているようである。

コロナに関しては、結構よほどの事であると思うのであるが、だからと云ってどうすることも出来ないのだから、とにかく予防するのみである。

この春のマスク不足から、所謂「アベノマスク」の配布。余分なマスクの福祉施設等への寄付。そんな流れがあり、私たち末端もその恩恵にあずかることが出来たこともあり、本当に大量のマスクを路上に配布することが出来た。布マスクのみならず、100人程度の仲間に50枚入りのサージカルマスクを一度に提供するなんて荒技もしているので、枚数でいったら2万枚を優に越すマスクが新宿の路上には出回ったことになる。

そんなこともあり、マスク生活と云う新しい日常に慣れるのには新宿の仲間達は、そんなに苦はなく、移行し

た。屋外の「密」はそんなには気にせず、とにかくマスク着用だけは、かなり神経質に伝えたりしていたので、感染予防にはなっているのかも知れない。

月に一度、巡回を同行してくれる医療班の方々も協力してもらい、石鹸の配布もそうであるが、うがい、手洗い、マスク着用の徹底の呼びかけと実践。そして、体調不良の仲間の早期発見と、市販薬の提供、早期通院への手助けが、今年は通年的に注意深くされている。医療従事者の方々は職場でも大変であると思われるのに、路上の仲間にもまで心を使ってもらい、本当に感謝しかない。

まあ、それでもマスクをしないで喋り出すおっちゃんなども時にはいるのであるが、合えばその都度、「マスク、マスク」と、それが会話の導入部となり、注意喚起にもなる。ただ「怖いね」ではなく、どうやって身を守るのか、その意識だけはかなり向上したと思われる。

おかげで、路上から結核の話は今も結構あるのであるが、コロナに感染したと云う話は、路上からも役所からも聞かない。衛生的な環境は宜しくはないのであるが、そこからの発症がないと云うことは、まあ、(今のところであるが) ちゃんと胸を撫で下ろしているところもある。

こう云う感染症と云うのは、保健衛生の専門家でもないし、また、医療従事者が常時居るわけでもないので、いざ、そう云う事態になったら対応が大変でもある。

危機監視のマニュアルと云うものは路上には当然ながらない。そもそも路上生活を認めないと云う立場の東京



都から指導やアドバイスも当然ながらない。マスクも住所がないので役所からは直接貰えない。

役所の直接的な呼びかけの回路は「巡回相談」があるのであるが、こと、このコロナに関してはほとんど機能していないようである。マスク一枚も配れないような「巡回相談」では、どないしようもない。

炊き出しなども、保健所が認めているわけではないので、これまた、どうしたら良いのかの話もない。民間は各団体と各人に対策はお任せしますと云うことのようにある。

そうなると、情報源がどうなるかによって、対応も変わる。対応できなく炊き出しを止めてしまう団体もあるが、こんな状況の中で、それを非難などは出来ない。

そんな感じで、なかなか「いままで通り」の生活が困難になることもある。寝場所も、居場所も、食う場所も。

そう云う仲間は色々と動き出す。動く先は誰に言われなくとも判りきっている。知りあいの伝手を辿ってと云うのが普通であるが、その伝手が切れた時は福祉事務所。そこまでならなければ福祉事務所には行かない。どうにかなると思うし、実際、どうにかなって来た。今回が特別であるとは思わない。

それでも、夏場から秋にかけ、人の移動は目に見えるようにもなった。古い仲間は一人欠け、二人欠け、そこに、何処ぞかから流れ着いた見知らぬ仲間や、新しい仲間が加わる。全体としての数は同じであっても、中味が変わっていく。

歌舞伎町の飲食街が、「夜の町」キャンペーンなど、風評被害のようなものも加わり、軒並み営業停止にまでなり、そこに勤めていた従業員も首を切られ生活が立ち行かなくなり、どこへ行けば良いのか分からないから、とりあえず新宿の福祉事務所に駆け込むなんて云うケースが多くなり、こちらもまた深刻になりつつあったが、それも大きな波ではなく、聞いてみると、辛うじて解雇を免れたと云う従業員もいるようである。

そんな中、外出自粛もなんだか解け、営業自粛もこれまた解け、GO TOだ何だとかで新宿の街並みも普段と変わらぬ（外国人観光客が居ないだけ）ようになりつつあったが、冬が来るぞと、気温が下がりはじめた頃、「第三派」であり、現在進行中の波は、これまた大変そうでもある。

「まいったな 2020」と云う大きな看板が渋谷にはあるが、なんとも世相を言い表している。これからどうにかなるのか、ワクチンが出来ても、それが効くのか、安全なのか、それこそ国民全員に提供できるのか、山ほどの心配が山積みの中、まいったなは、2021年にまで引き継がれることとなりそうである。

しかし、そうは言っても、どうにかなるさと考えるしかない。

今まで上から目線でしか見ていなかった社会が、おっちゃん等の遅しさに学ぶ時なのかも知れない。彼、彼女らは「困った、困った」とは言わない。「助けて、助けて」とも言わない。どんなに社会が煽ったとしても「今のままで良い」と言う。そして、限られた条件の中でも、身体が動く限り、雑仕事がある限り、淡々と生きる道を選らび、身体が動かなくなったり、病気にでもならない限り、公的な施策を選択はしない。それまでは「共助」で、仲間や、支援者と共に、助けあひながら生きている。

淡々と、そしてしっかりと社会を見つめているおっちゃん等に乾杯である。

そんなおっちゃん等と冬越し、年越しを今年もまた、静かに行く。コロナに勝つぞ、などと出来もしない勇ましいことは何一つ言うつもりはない。

時の流れに、身を任せである。

(了)



「コロナ禍」の中、連絡会のメイン活動でもある路上生活者への衣類、食事提供活動は、とても神経を使うものであった。提供の場所が限られている中で、「密」になるなと云うのが、かなり無理な注文で、どうしてもそう云う場所には群れてしまう。

なので、換気の良い屋外で、マスク着用、短時間で終わらせるようにしようとなり、都庁下の衣類提供タイムは、毎週日曜日夕方の恒例となった。ちょっと時間がずれると、そこには誰も居ない。時間に遅れて来てしまった仲間には申し訳ないし、もうちょっとじっくりとやりたいのであるが、これもコロナ対策。全員マスク着用で、とつととやって、とつとと終わる。そんな感じで、今の時期は毛布も含めて衣類やら日常品などを30分以内に提供している。

ここは短時間なので、遅れてしまった仲間や、都庁まで行くのに難儀な仲間は、高田馬場方面の仲間には、高田馬場関ビル内事務所兼倉庫にて、こちらは屋内となるが、週に2回シャワーサービスの時間に、換気を常に良くしながら、人数を制限しながら衣類を選んでもらうこととなった。高田馬場では同時に食事の提供もしており、より慎重にとのことで、マスク着用はもちろんのこと、手の消毒、待っている時のソーシャルディスタンスの確保を徹底しているが、このところ毛布が集まり、部屋の半分が毛布で埋まってしまって、窓が開かない状態なので、冬なのに扇風機をガンガン回して換気を確保している始末。

毎週日曜日のおにぎり作りは、常日ごろから衛生面を気にしながら作業をしているので、それを徹底させ、おにぎりパトロールで、屋外で巡回しながら手渡しをしているので、こちらは特に問題はなし。

まあ、そんなこんなで、毎週200-300個の新宿方面での おにぎりの提供、高田馬場方面では、毎月60箱程度のカロリーメイト等非常食の提供、シャワーサービス時には、寄付で頂いた缶詰めや、食パン、お菓子などの提供を月に100名程の仲間提供をし、また、衣類毛布、カミソリなどの日常品も都庁下では述べ約300名、関ビルでは約100名前後の仲間提供をし続けている。

これは、昨年とほぼ同様なので、「コロナ禍」の中でも、色々と工夫をしながら、仲間にとって一番大事な「衣食」の部分は滞りなく実施できている。

応急援護と云えば応急援護であり、助け合いと云えば助け合いである。今より状況が悪くならないような支援、人が生きる上での必要不可欠な「衣食住」の補充支援は、別に「コロナ」があろうがなかろうが、路上に人が居る限り必要である。その手法はその時々によって変わる。まあ、それだけであるが。

さて、「住」の問題は、これは結構大変な年でもあり、そして我々のような小さな団体がわいのわいの言ったとしても、そう変わるものでもない。自前でやると言ったとしても、出来ることなど限られている。オリンピック目当ての「民泊」業者は大変であろうが、それでは、その資源を路上生活者へとは中々ならない。外国人労働者が入居している低廉なアパートも空きが出ているかと云えば、「住居確保給付金」があり、そこに一定程度住み続けられる。なので、空いていない。他人の不幸の連鎖に潜り込もうとしてもそうは問屋は卸さないものである。公営住宅も一版都民の困窮が増せば、そちら優先にもなり、高齢者の住宅問題はその問題として残ったままなので、特養ホームなどにも、そうそう入れるものでもない。我々はどこで住み続けていられるのか？新規ともなれば、これは大きな課題であるが、とりあえずの「宿」は用意するが、それから先はどうしたら良いのかが、これも「コロナ」であろうがなかろうが、拡大しようが、収束しようが、課題であり続けるのであろう。



パト 2020

巡回活動、パトロールは毎週水曜日の高田馬場方面の巡回、毎週日曜日の新宿方面、外郭方面の巡回（おにぎりパトロール、医療班同行パトロール、新宿駅深夜パトロール）をこれまた昨年とほぼ同様に定期的に実施できている。

コロナの関係で、慎重を期して、その担い手が減ってしまった（「もし、自分が感染して無症状であったら、おじさん達に移してしまうのが怖い」ので、ボランティア活動を自粛する若い方も居り）が、それはそれで仕方がなく、そんな時は決死隊である。ボランティアがいなくても、いつも連絡会の主力は当事者や元当事者である。もちろん、健康管理はしっかりとさせた上で、マスク着用と、大量のマスクをおにぎりと一緒に渡すため大きなカバンにしまい、巡回を続けている。

深夜のパトロールは医療班の先生が率先してやって頂いており、個別に話しが聞け、薬の需要がある深夜の時間帯は専門家が担ってもくれており、感謝、感謝。

医者に行くほどでもない体調不良は良くあることで、普通なら市販薬を買って何とかするのであるが、その市販薬は案外と高いので、なかなか買えるものでもない。そんなことで「薬が欲しい」との需要は今も昔も変わらない。役所に行っても「医者に行け」「福祉にかかれ」と言われるだけ、なので、パトロールには市販薬は付き物。それに、今度はマスクもつけていかないと、今年前半のマスク不足は解消したものの、それでも買わないとマスクは手に入らない。これは、今やそんな値段はしないが、それでも「買ってまで」と躊躇する。なので、マスクはとにかく大量に提供をする。ホカロンと違い、重くはないので、カバンの中には沢山入る。常に新しいマスクをつけるのが、「新しい日常」とやらで、路上生活者もその「日常」に慣れてもらうため、そして、自分の身を守るため、マスク。

それでも、パトロールの範囲はどうしても狭くなりがちで、コースでないところでだいたい事故やら事件やら悲劇やらgが起こったりするので、そこをどうするのかは悩ましいところである。

シャワー 2020

シャワーサービスは屋内での活動のため、慎重に行っている。

同じく屋内で実施していた、月1度の鍼灸相談会は4月から一定期間お休みし、現在は、常連の仲間限定したサービスに変更し、また週一度の「相談会」も随時実施に変更するなど、ここの部分は色々工夫をしている。

身体を定期的に洗い、着替えをして、衛生面に注意しようと言うのは、長年の連絡会の仲間への訴え。

「襦袢は着てても」の時代ではない。それなりの格好をしておかないと、一般の人と同じ場所に入りにくいし、奇異の目で見られ、警備員に注意され、警官に職質にあうのが、寄せ場機能がもはやなくなった



新宿と云う街の現実。

風呂券よこせと云うのが、昔からの要求事項、衣類配布も早い頃に行き、役所にシャワールームが出来たが、役所まで行くのが面倒と云う仲間のために、高田馬場でも独自にやってやろうと、事務所の中の風呂場を活用し、火、木のシャワーサービスを開始したのは十数年も前の話。それ以来シャワーのお湯は止めていない。

長時間、「密」になりがちな場所は、とにかく換気。待ち人が座る椅子もソーシャルディスタンスで距離をとって。マスクをしながらでも「大きな声」は出さない。そんなことを皆、自主的に行いながら、この活動を守っている。

福祉 2020

「住」への橋渡しをしていくのも福祉行動で、NPOが運営している馬場ハウスにせよ、麦の家にせよ、最終的には福祉に相談をしながら身の行き末の解決を図っている。かつては相談場所にまで行くのが難儀であったが、今は何もなくても相談に行くようになったから、まあ良いのではあるが、自立支援事業にせよ、生活保護にせよ、法外援護にせよ、人が住むところには、人々の業が集まるからか、色々な課題があつて、そこを行ったり来たりは当たり前。教科書的には定住、定着が最終ゴールなのであるが、ゴールを決められない人々が、それなりに居るのは、いつの世も同じ。それを非難したり、弾劾したり、指導したり、同化したりと、そんなことはせず、現状を追認しながら、ひたすら「自分の敵は自分である」と語り続けるのが連絡会であつたりもする。制度を使わない「共助」と云うのは理想であるが、なかなかそうもいかないのが、多様な人々がただ集まる新宿の特徴。そして、集まることを禁じられ、かといって籠る「おうち」がない人々は、制度を使わない時、何処へ行ったら良いのか？そんな根源的な問いが「コロナ禍」では浮き彫りになっている。理想郷はあるようで、ない。

相談をしても、制度の中のゴールを目指す人は良いが、そうでない人は、とにかく「お試し」で相談につなげるしかない。それで、瞬間的にうまく行くケースもあり、失敗したケースもあり、何かと路上の先は難しい。それでも出来る限り、福祉事務所に顔を出したり、待ち合わせたり。

その他 2020

新潟いりりん村への出張など農業活動は、今年は東京からの外出自粛が続いたため、新潟に田植えと稲刈りの二度ほどの行事に少人数にての参加となりました。その代わり、いつもお米を頂いている長野県佐久市の「山谷農場」から野菜の寄付が山ほど送られて来たりして、大変助かっております。

そんなこともあり、地方の状況が良く分からないと、東京のことも良く分からなくなって来ますが、そこは、リモートならぬ想像力だけで繋がっていかうと思っております。

8月の慰霊祭は人を集めず、三々五々で開催しました。仏さんもそのほうが良からうとのこと。

また、初夏から夏までは定額給付金のため住所を探したり、提供したり、役所に同行したりと個別対応を行い、20数名程の仲間のお手伝いをし、秋は秋として役所のお手伝いで、「国勢調査」への協力をしました。

そんなこんなで少数精鋭で働き続け疲労困憊。冬への英気を養おうと、GO-TOをちゃっかり活用しながら有志9名の当事者、元当事者のボランティアスタッフで秩父に温泉旅行。まあ、男同士で傷をなめあうこう云う町内会的なひっそり旅行もまた楽し。

初冬は初冬で、集まりはじめた衣類、毛布の仕分作業がこれまた大変。ひいひい言いながら一日かけ仕分けをし、車に積み込む作業を少数のスタッフで毎週やっています。

まいったな 2020～2021

新宿年越集中行動

2020年12月27日(日)～2021年1月4日(月)

医療班+おにパト巡回+衣類毛布配布	都庁下出発	27日(日) 3日(日)
餅つき大会(関ビル前)		29日(火)
年越し祭り(新宿中央公園)		31日(木)
駅重点パトロール、深夜調査パト		30日(水) 3日(日)
高田馬場パト		30日(水)
常設衣料テント設営(関ビル前)		29日(火)～3日(日)
関ビル前弁当配布		30日(水) 1日(金) 2日(土)
福祉行動		28日(月) 4日(月)

新宿連絡会 090-3818-3450

新宿連絡会 会計報告

2020年度 4月～10月新宿連絡会収支報告

この間のご支援、ありがとうございます。
「コロナ禍」の中、多くの一般市民の方々が困難に直面している中、路上生活者への支援へと云う特殊な支援に心を寄せて頂き、本当にありがとうございます。

引き続き内容の濃い活動を行なっております。是非とも私たちの活動へのご理解とご協力を宜しくお願い致します。

勘定科目	金額	勘定科目	金額
I 計上収入の部		消耗品費	48,763
1 寄付金収入	1,185,760	事務用品費	0
		事務所費分担金	180,000
計上収入合計	1,185,760	衛生管理費	11,442
		支払手数料	18,216
II 計上支出の部		車両費	56,839
1 事業費		修繕費	0
1 弁当おにぎり事業	321,712	計上支出合計	946,157
2 越年越冬事業	0	計上収支差額	239,603
その他活動事業	234,212	前期収支差額	△193,870
2 管理費		次期繰越金	45,733
旅費交通費	13,500		
通信費	61,473		

●活動カンパ 振込は、郵便振替口座00160-6-190947「新宿連絡会」まで。

●郵便物、物資カンパの送付先は以下の住所にお願いします

★郵便物は

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号 新宿連絡会 宛てでお願いします。